

05

May
2025

【月刊】キリスト教書評誌

本の

HON-NO-HIROBA

ひろば

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2025年5月1日発行（毎月一回1日発行）第809号

出会い・本・人

生きているということには不安があるんだ 平林孝裕

特集シリーズこの三冊！

ボンヘッファーを知るならこの三冊！ 小海 基

本・批評と紹介

D・ボンヘッファー 著／宮田光雄、村松恵二、本田逸夫、小嶋大造、星野 修 訳

倫理 佐藤司郎

左近 豊編 聖書における和解の思想 小友 聡

石丸昌彦 著 不安と孤独の処方箋 増田 琴

宮本久雄、石井智恵美編 押田成人 遊行の巡礼者 小暮康久

及川 信 著 恋人たちの夜明け 岩崎真紀

キム・ドンス 著／高野啓子 訳

平和をつくるということ ピースメーカー 榎本榮次

深谷松男 著 二世紀の友に贈る平和へのメッセージ 樋口 進

宮田光雄 著 〈出会い〉の旅 最上敏樹

E・P・サンダース 著／浅野淳博 訳

パウロとパレスチナ・ユダヤ教 山口希生

◆ 近刊情報

◆ 書店案内

3月刊行の
好評既刊!



クレド
『キリスト教の伝統』(全5巻)で知られる教理史家ヤロスラフ・ペリカンの後期の代表作。古代から現代までの膨大な文献を渉猟し、信条と信仰告白の定義・起源・權威・歴史を詳述した記念碑的著作。

クレド

キリスト教の伝統における
信条と信仰告白の歴史的・神学的入門

J・ペリカン 本城仰太訳

●A5判・784頁・定価9,460円

近藤勝彦

わたしの神学六十年

神学的自伝「わたしの神学六十年」と、主著『キリスト教教義学』をめぐって語った講演と論文を収録。著者の神学的主張を理解するための最良の手引き。

●四六判・220頁・定価1,980円

好評既刊!



近藤勝彦

日本キリスト教神学小史

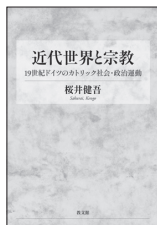
教義学の視点から

植村正久、高倉徳太郎、熊野義孝、北森嘉蔵、大木英夫——私たちは彼らの神学の何を批判し、何を継承すべきか? 日本を代表する5人の神学者・牧師の教義学の確立と展開に注目しながら考察する。

●四六判・218頁・定価2,420円

近代世界と宗教

桜井健吾 19世紀ドイツのカトリック社会政治運動



「カトリック教徒大会」「カリタス」「コルピング職人組合」「カトリック労働者同盟」「キリスト教労働組合」「中央党」などの社会的・政治的運動の事例から検証した画期的な著作。ドイツ近代史研究に不可欠な書。

●A5判・424頁・定価5,940円

桜井健吾

労働者の司教ケテラーとその時代

十九世紀ドイツの社会問題とカトリック社会思想

●A5判・328頁・定価5,500円

好評既刊!





生きているということには不安があるんだ

平林孝裕

雷に打たれたように、その本と出会い人生が変わった、そこまでの本は思い当たらない。もし、あえて「出会い」といえる本があるとすれば、「世界の名著」『キルケゴール』（中央公論社）を挙げることになろう。当時、同叢書の新装版が刊行されつつあった。高校一年生の夏休みを過ごす自分は、なぜか本書を手にとった。「一九七九年八月購入」との記入がある。

手元の黄ばんだ本書から分かるのは「四年も」たつてから、入念に線を引いて書き込みをしながら読み込んだ様子である。当時、後に生涯の師となる小川圭治先生の『死に至る病』の講読に出席していた。私の関心はその頃、キルケゴールにはなかったが、この講読に出席し始めたことを機に、古い本棚から手に取ったのだろう。しかし、なぜそれほど入念に読むに至ったのか。内表紙に自分で書きつけた「生きているということには不安があるんだ」との言葉がその当時を物語っている。

大学二年生の私は、年齢なりの蹉跌を経験していた。「…不

安がある…」との言葉は、梶田啓三郎先生が内田百閒から聴いた言葉として「解説」にある。ただ『不安の概念』は難解すぎたのか、それほど丁寧に読んだ形跡は見当たらない。最も熱心に読んだことが明らかなのは『哲学的断片』であった。不安とは何か、よく分からなかったが、そこからの救いは垣間見えたのであろう。真の教師とは、本文の言葉通りでないが、「真理を理解しない者に真理を理解する条件をも与える者」であり、「神自身」であるという趣旨の文章に線が引かれている。いづしか私は、真剣にキルケゴールに取り組むようになっていた。本書との出会いから、キルケゴール研究を志し、小川圭治先生の下で学び、コペンハーゲンにも留学した、そして…。雷に打たれたようにではなかった。けれども、じわじわと自分の人生は向きを変えた。そんな本との出会い方もあるのである。

（ひらばやし・たかひろ 関西学院大学教員）



▼シリーズ この三冊！

ボンヘッファーを知るならこの三冊！

小海 基

(こかい・もとい…日本基督教団荻窪教会牧師、
日本ボンヘッファー研究会代表)

今年はいーとトリヒ・ボンヘッファーが絶滅強制収容所で絞首刑となって八〇年となる特別な年である。ドイツ語版新全集(DBW)全一七巻は既に一九八八〜一九九〇年という、ドイツばかりかヨーロッパが東西分断から統一を果たしていく激動の時期に、途中出版社も変わるという難事業の末に完結。対応する英語版新全集一七巻も、一九九六〜二〇一四年という驚異的な急ピッチで完結していた。いよいよ日本でもDBW版『倫理』の全訳が出た。今秋には『獄中書簡』も刊行予定である。旧「選集」版のボンヘッファー像とは全く違う全貌を目の当たり

にすることになるだろう。まさに「ボンヘッファー・イヤー」の始まりである。難事業ではあるが、この期待と盛り上がりの中で次の「三冊」を推したい。ボンヘッファーという人を、「神学者―キリスト者―同時代人」(友人ベートゲの区分)という波乱の生涯を貫いて駆り立て、「たとい主から差し出される杯は苦くとも」(獄中詩「善き力」に『讃美歌21』四六九、『新生賛美歌』七三)と彼自身が歌った「殉教」の最期さえも、「暴君暗殺論」を用いて自己正当化せず、罪責を静かに受け入れていった「服従」の背後にあるものに触れる「三冊」(正確には部分)であ

る。

第一冊目は、出たばかりの新訳版『倫理』の中の「教会は告白する――」……と、たたみかけるところである(一九二頁以下)。これまでの森野善右衛門訳は神学者の視点からの訳、あの時代の空気を知る者として、自身も含め日本の教会に何が欠けていたのかという鋭い問いを持って訳された迫力が魅力であった。今度の新訳は、宮田光雄以外の四人の訳者は「バルト、ボンヘッファーに必ずしも親しくない」非神学畑の政治学者たちだ。その分、神学畑よりはるかに広い視点からの訳になっているのが魅力だ。日本の政治分野では「神学」という言葉が侮蔑的・揶揄的に用いられたりする風潮があるが、あの時代の一歩の問題をドイツがまだ敗戦も迎えていない時点で、「非常時」を言い逃れにせず、具体的に正面からこうした言葉ではつきりと罪責告白していたのが「神学」の分野だったことに、若手の政治学者たちが恐れと慄きをもって訳していることが伝わって来る部分だ。モーセの十戒に沿って容赦なく罪

責告白が続いていく。「以上に述べたことは言い過ぎであろうか? ここでまったく正しい二、三の人たちが立ち上がった(教会ではなく、教会以外のすべてのものこそが罪を犯したのだ)」ということが証明しようとするかもしれない。……このような人は、罪責を告白することが、この世の罪を担いたもうた(イエス・キリストの形)を取り戻すことではなく、たんに(教会の地位を)道徳的に格下げする危険な試みとしか認識しないのである」。敗戦後すぐに出された「シュトゥットガルト罪責告白」(一九四五年一〇月)と比べても、この具体性は格段のものがある。ボンヘッファーのライフワークが『倫理』にあったことが伝わってくる。

二冊目に挙げるのは、『ボンヘッファー説教全集2 1931-1935年』の第Ⅱ部「一九三三年 ベルリン」(一一五-一五二頁)に収められている五つの説教である。一九三三年、ドイツの覇権を掌握したヒトラーが絶頂へと向かう中、ボンヘッファーのラジオ演説さえも中断さ

れてしまう状況の中で、公に語られた名説教である。やがて当局から説教することとも出版することも禁じられ、後に収監されたテーゲル刑務所でも説教を許されなかったボンヘッファーであったが、語るべき時に神の言葉を語るといのはまさにこういうことなのだと今でも教えられる説教である。これを当時大統領だったヒンデンブルクも座っていたというベルリンの聴衆たちの面前で臆することなく語り切るというのが、説教者としてどれほど勇気がいったかと思うのである。旧約の預言者たちもこうやって神の言葉を担っていたのだと教えられる。先日ワシントン大聖堂の説教壇で、就任したばかりのトランプ大統領の面前で明確に神の言葉を語り伝え、具体的に勧告した米国聖公会の女性司教の勇敢で誠実な説教が話題となったが、そういう場面に直面して逃げずに語るといのは、単純であるけれども大変な「服従」の決断である。筆者自身が「安価な恵み」、安易な「慰め」に走り、神の言葉を担う説教から逃げていないか、読み返すたびに問われる

説教である。新全集が編纂されていく過程で、こうした『説教全集』(日本語版三卷)や、『聖書研究』(旧約編、新約編の二卷)を編纂、出版したのはドイツ以外では多分日本だけだと思う。神の言葉を担った教会は、ひるむことなく命がけで社会に伝えることから逃げてはならない。そのことを、日本の教会がボンヘッファーから学び続けようとしている姿勢をこれらの出版は物語っている。その中でもこの五つの説教がとりわけ胸を打つのは、託された神の言葉を薄めることなく単純に語ることへのためらいと、それに打ち勝ち導かれる恵みが率直に語られ、聴衆と共に「我らの言葉」、「教会の言葉」として出来事になっていく一切が生々しく記録されているからである。「代理」の役目を放棄し、「安価な恵み」に逃れようとする教会に向かって、五つの説教は冒頭からこんな風に語られている。実に一貫している。「恐れ克服——これがここで述べ伝えられていることである。聖書、福音、キリスト、教会、信仰——それは、恐れに対するときの声

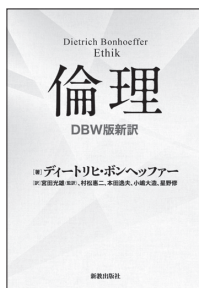
である。……しかし、人間は恐れてはならない。私たちは恐れてはならないのだ！」あるいは私たちは教会は、「臆病で信仰の薄い……あまりにも慎重で心配性の……神の前に何者かであろうとして、何者でもないすべての者」ギデオンだからこそ、「この召しの声は、この世にあるほかの多くのものの一つである私たちプロテスタント教会に向かって呼びかける。あなたがイスラエルを救うべきである」。「説教の喜び——私たち今日の人間には、それを見出すのが大変困難になっている。それは、私たちが説教の言葉は聞くが、キリストの言葉を聞かないせいである」。「預言者対祭司、信仰の教会対この世の教会、モーセの教会対アロンの教会——キリストの教会におけるこの永遠の争闘について、そしてその大円団について、私たちは、今日、聴くことにしよう」。「もし私たちの思い通りになるのだったら、私たちは自分のしなければならぬ決定を、今一度、喜んで回避することだろう。……しかし、まさに——

感謝すべきなのであるが——私たちの思

い通りには行かない。神が私たちの思いにまさに逆らわれるのである。……群れが大きかろうが小さかろうが、卑しかりが立派であろうが、弱かろうが強かろうが、キリストを告白するならば、その群れに勝利は永遠にとどまる。恐れるな小さな群れよ。御国を下さることはあなた方の父の御心なのである」。

三冊目は、ベートゲによる大『伝記』（一九六七年）に三年も先立って出された世界初のボンヘッファー伝である森平太の『服従と抵抗への道』や、世界中どこにも類書が見られない（？）村上伸『ボンヘッファー紀行——その足跡を訪ねて』（この一冊片手に旅をすればボンヘッファーが亡くなったのがまだほんの八〇年前のことで、まだまだ生々しい痕跡に触れることが出来ることを教えられる）を上げたいところなのだが、今回あえてお勧めするのはマルティン・クスケ『この世的に生きるキリスト者——ボンヘッファーの幻』の第IV章、「聖餐式を新たに身近に体験できたので」である。敗戦後東西分断で社会主義圏に入れられ

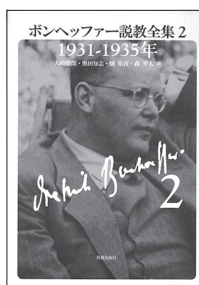
た東独の教会は、教会税の特権を放棄させられ、堅信礼を受けて国家の成人式を選ばなかったキリスト者青年は大学入試資格や公務員試験資格を失うという様々な不利益をこうむることになる。クスケ牧師もそうした苦闘の中で新全集における『服従』の編纂を担ったが、「秘密警察」協力問題に巻き込まれ、自死という悲劇の最期を迎えてしまう。東独のキリスト者にとってボンヘッファーの「この世的にキリスト者であること」、「成人性」という幻がどれほど現実的なものであったかを知らされる。本章は東独の『時の徴』誌上で一九七九年になされた「聖餐式は私にとって何を意味しているか」というアンケートとその回答をめぐってなされた考察である。西側の教会以上に東側では、国民教会の崩壊、領邦教会からの離脱、自由教会への発展を意識せざるを得なかった中で、教会の聖餐式があまりに形而上学的、個人主義的、後見役的閉ざされた宗教的、特権的なものになり果てていることに、当時の東独の牧師たちの多くが危機感を抱いていたことをこ



『倫理——DBW版新訳』

ディートリヒ・ボンヘッファー：著
宮田光雄、村松恵二、星野修、本田逸夫、小嶋大造：訳
新教出版社
2025 年刊
四六判 820 頁
6,930 円

の章から知らされる。せいぜいのところは二、三度、それも礼拝出席者の二〇パーセントもあずからないような「聖餐式」で本当に良いのかという問いの中で、クスケたちは大人も子どもも、「食卓を円く囲み」、「パンとぶどう酒を受けるだけでなく分け与え合う」、「すべての人が招かれている聖餐式」をヘルンフト兄弟団やニカラグアのソレンチナーメの農民たちの実践から学び、教会大会で実践するよう提起していくのである。もちろん



『ボンヘッファー説教全集 集 2——1931-1935 年』

ディートリヒ・ボンヘッファー：著
大崎節郎、奥田知志、畑祐喜、森平太：訳
新教出版社
2004 年
A5 判 320 頁
4,950 円

んまだこの時点では教会当局は慎重な対応であったが、やがて教会大会ではそれが当たり前となり、東西統一後、二〇〇四年にはラインラント州教会で「聖餐、招かれているのはすべての人々」が決議寸前に至るようになり、更に二〇一三年にはヘッセン・ナッサウ州教会が「開かれた聖餐」に踏み切ったことを私たちは知らされている。クスケをはじめとする神学者たちが追求していた「この世性」、「成人性」と並ぶボンヘッ



『この世的に生きるキリスト者——ボンヘッファーの幻』

マルティン・クスケ：著
日本ボンヘッファー研究会：訳
新教出版社
1990 年
四六判 316 頁
3,631 円

ファー神学のもう一つの柱、「彼岸的ではなく此岸的に」、「旧約聖書的に新約を見直す」ということも、一九八〇年にラインラント州決議「キリスト者とユダヤ人の関係の更新のために」がなされ、その後の「讃美歌 E.G.」編纂等にまで大きく影響していったことも私たちは知られている。

私たち日本の教会もこうしたボンヘッファーたちの提起した改革を模索せざるを得ないだろう。

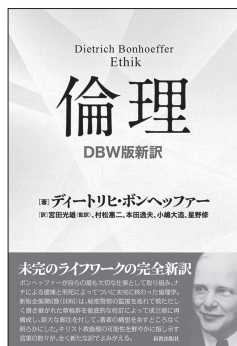
過去百年の最も重要な 神学的ドキュメント

〈評者〉
佐藤司郎

待望のボンヘッファー『倫理』の新訳が宮田光雄先生と四人の共訳者によって刊行の運びに至ったこと、慶賀にたえません。

何より今回の新訳は、たんに新しく訳し直されたというのではなくて、ドイツ語版全集第六卷（一九九二年）の第二版（一九九八年）を定本としていて、これによってわれわれは『倫理』の現時点での最終的な本文を前にしていることになります。

ディートリヒ・ボンヘッファー（1906-1945）はよく知られているようにドイツの神学者で、やがて反ナチ抵抗運動に加わり、逮捕され、二年の獄中生活をへて、一九四五年四月九日、フロッセンビュルク強制収容所で三九歳で殉教したキリスト者です。『倫理』は軍部の抵抗運動に深く関わりはじめた一九四〇年夏頃から四三年四月五日ベルリ



倫理

DBW版新訳

著
ディートリヒ・ボンヘッファー

宮田光雄、村松惠二、本田逸夫、
小嶋大造、星野 修訳



ンの両親の家で逮捕されるまで、告白教会の一員としてまた国防軍諜報部員して活動する中、断続的に書き記されたものです。逮捕されたとき机上には、偽装のため散らかされた資料とともに『倫理』の一部も置かれていました。しかし草稿の多くが秘匿されていて、今日われわれが彼の『倫理』を手にすることができるのは、ひとえにボンヘッファーの弟子であり友人であったベートルゲのおかげです。『倫理』は未完ながら「ライフワーク」であり、過去百年を振り返ってもっとも重要な神学的ドキュメントと言つて過言ではありません。

『倫理』がはじめて出版されたのは戦後まもない一九四九年、その後諸論稿が新しく配列し直されて出版されたのは一九六三年（第六版）でした。八〇年代に入り、『倫理』のテキスト、とくに構成の問題をめぐって問題提起がなさ

第58回 神学セミナー
地域における教会の課題

明日の 地域と教会

関西学院大学神学部ブックレット

関西学院大学神学部【編】



コロナ禍は、21世紀にますます深刻化する高齢化と少子化、経済格差と貧困、地域コミュニティの崩壊と人々の孤立や不安といった社会の諸問題をよりいっそう浮き彫りにした。これらの問題は、地域により具体的な様相は異なるが、地域の中にある教会が直面している課題でもある。神学的な視点、個々の教会の現場の視点、そしてエキュメニカルな意見交換を通して地域における教会の課題をさまざまな角度から捉え、明日の地域と教会についてともに考える。

A5判・並製・122頁、定価1,760円(税込)

キリスト新聞社 since 1946

11-20014 東京都文京区関口1-44-7F
03-5579-2432 support@kirishin.com

れ、研究も新たな段階を迎えることになります。

今回新訳が依拠した全集版の特長は、ある種の解釈理論にしたがって配列することを止め、一〇〇近くある草稿等の客観的特徴の比較研究により成立時期を特定し、厳密に成立順に配列したことです。その結果、新訳の最初の章は「キリスト・現実・善」となり、ベートゲなどが早くから指摘していたこの章の基礎的重要性は形式的にも明らかにいったと言っているかも知れません。究極的な現実とはキリストにおいて啓示された神の現実であり、それを受けとめ応答するわれわれの思考と生き方がつねに問われている、これがボンヘッファーの神学的思惟の基礎であることを改めて認識したところです。一九四〇年夏、彼が当面しつつあった嵐を孕む現実の厳しさを前に、しかし落ち着いて

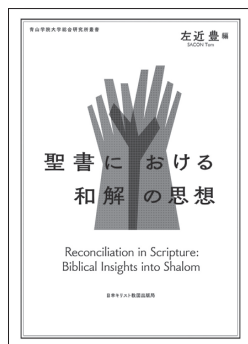
じっくり考え抜かれている一行一行に、感銘を深くしました。

本書の「編集者まえがき」(代表イルゼ・テート)も「年表」や「各版の草稿対照表」もきわめて有用です。それ以上に、編集者共同執筆による「編集者あとがき」、そして宮田光雄先生による「訳者解説」は、ボンヘッファー神学へのすぐれた手引きとなっています。これらを参考に本書を読み進めながら、二一世紀も四分の一を経過しますます混迷を深くする時代の中で「何が神の意志であるのか」問いつづける責任が、われわれにも課せられているように思います。

(さとう・しろう) 尚綱学院理事長・学院長
(四六判・八一〇頁・定価六九三〇円・新教出版社)

現代世界の喫緊の課題を 聖書から徹底的に論じる注目作

〈評者〉 小友 聡



聖書における和解の思想
左近 豊



「和解」は、喫緊の思想的課題である。ウクライナ危機、ガザ紛争、米社会の分断など、現代において「和解」が切望されている。この和解についてそもそも聖書がどう語り、何を教えるかを私たちは知らなければならない。この主題をめぐり、聖書学者が中心になって編まれた論文集が本書である。青山学院大学総合研究所が5年がかりで研究を重ねた共同プロジェクトがこのたび書籍化された。

7名の聖書学者・神学者の寄稿によって本書は編まれている。それぞれ「和解」という思想を聖書から深く読み取り、徹底的に論じている。聖書学の学術論文集ではあるが、「和解」という主題が現代的な射程を有しているだけに、聖書学や聖書神学の知見だけではなく、聖書における和解の今日的意義について読者は深く学ぶことができる。

本書は3部構成。第1部は神学、第2部は旧約聖書学の

知見からの和解、第3部は新約聖書学の知見からの和解である。多元的、多声的な文脈で聖書の「和解」を理解しようという見通しから全体が組み立てられている。

内容を簡単に紹介しよう。第1部では、藤原淳賀氏^{あつよし}によって、聖書の和解の神学的位置づけが本書の導入として総論的に論じられる。

第2部では、左近豊氏^{とむ}が旧約聖書の和解を概説するのみならず、預言書と諸書について和解を論じている。そこでは、和解概念が捕囚期という背景において、哀歌と第二イザヤのテクスト比較から読み解かれる。律法の和解については、藤田潤一郎氏が創世記20章を詳論する。注目に値するのは、米国の旧約学者ブルッゲマンと左近氏が対談形式で旧約の和解について意見を交わすことである。

第3部では、河野克也氏がパウロの和解理解をめぐって

聖書神学的な考察をしたあと、浅野淳博氏と辻学氏がそれぞれパウロの和解について緻密で学術的な議論を展開する。第2コリント5・16と21とローマ8・18と25の「和解」理解の相違について浅野氏と辻氏の解釈の違いが実に面白い。また、大宮謙氏は福音書における和解を興味深く論じる。その上で、河野氏は浅野氏、辻氏、大宮氏の議論を交通整理し、パウロの和解理解の射程と課題について論じている。おしまいに、藤原氏が聖書の和解を世界史的、教会史的視野から総括する。

以上が、本書の内容である。個々の論考は一級の聖書学者／神学者によって執筆され、聖書の和解概念と和解の思想的射程について基礎的研究成果を提示している。

評者が特に引き込まれて読んだのは、河野氏が本書11章

で、新約聖書学者たちが反ユダヤ主義に加担してきた歴史と、それを克服するための道筋を説いていることである。キリスト教徒とユダヤ教徒の「和解」を促進するために、聖書学が果たす役割が大きいことを評者は教わった。もう一つ、碩学ブルッゲマンの発言は意味を持っている。モーセ契約とダビデ王権の緊張関係が旧約聖書全体を貫くと指摘される。そもそも契約は旧約聖書の歴史的・神学的土台であり、神と民との関係における「和解」が絶対的な中心基盤であった。この契約概念の一貫性は旧約のみならず新約にも及ぶ。その目的はシャロームである。本書を読んで、聖書の和解を通観できることに気づかされた。

(おとも・さとし) 日本旧約学会会長
(A5判・三五二頁・定価四四〇〇円・日本キリスト教団出版局)

増補改訂版

新約聖書の本文研究 伝達・改悪・回復

B・M・メツガー／B・D・アーマン 橋本滋男／前川裕訳



私たちが手にする新約聖書の本文は、どのように現在の形となったのか。本文の元となる写本や本文批評について、最新の研究を踏まえて解説する。原著第4版より訳出。
A5判上製・448頁・定価6600円

説教黙想アレティア叢書

創世記 29―50章

日本キリスト教団出版局 編



創世記の重要単元の説教黙想集。下巻はヤコブのハラシ到着から故郷への帰還、ヨセフ物語の大団円までと、大島力師の論考「創世記の説教」を再録。
A5判並製・236頁・定価3520円

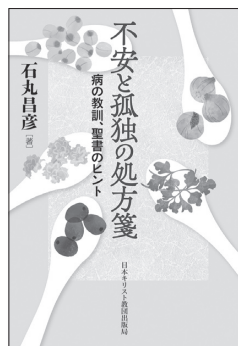
日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 03-3204-0457
E-mail: eigy@bp.uccj.or.jp (価格10%税込)

<https://bp-uccj.jp>

不安と孤独は神と出会うところ その旅路に同伴する書

〈評者〉 増田 琴



不安と孤独の処方箋
病の教訓、聖書のヒント
石丸昌彦著



精神科医として臨床と研究に携わり、死生学の講義を行ってきた著者のこの新刊には、現代社会を生きる私たちがこころの健康を守るためのヒントが綴られています。

第1章の病気と健康の基礎知識では、精神疾患と健康の概要が説明されます。その中で、言葉の問題にも触れています。精神疾患は「こころの病」なのか。母の精神疾患に向き合ってきた方が、それは脳という臓器の働きの不具合であると認識することによって「不調な脳の持ち主であるお母さんへのリスペクト（敬意）を取り戻し」ました（23ページ）。「リスペクトを取り戻す」。それは本書の通奏低音となっています。知識によって、社会的に植え付けられてきたイメージや、偏見に基づく他者の視線によって傷つけられた自己へのまなざしを回復できるのです。

第2章は具体的な精神疾患の症状について説明されます

が、「症例」ではなく、かけがえのない一人が全人的に受け止められている安心感を覚えます。

「病にはメッセージがある」という語りから始まり、「誤った意味づけや間違ったメッセージを退ける」必要性が説かれます。行き場がないための社会的入院など、社会の側の課題が浮き彫りにされています（87ページ）。「癒やし」とは、疾患の治療のみならず、共に生きる者との相互的な関係の中で与えられるものというメッセージは、私たちのあり方を問うているでしょう。

第3章では「不安」を病的な不安と健康な不安とに分類し、努力によって取り除くことができるかなど、不安を直視することによって見えてくる姿を開示しています。孤独についても同様、孤独のもつ積極的な側面について、リトリート（神に心を向けるため日常から離れて過ごすこと）

や沈黙のもつ積極的な効用が語られ、「孤独」と「孤立」の違いについて説明されます。それらは、安心できるコミュニケーションを喪失した現代人への深いメッセージです。

本書は聖書からの引用も多く、信によって生きることへの招きともなっています。不安と孤独は死別などの喪失によって生じやすいものですが、「いつも目の前に見ていた相手と会えなくなるとき……その人の記憶や印象があらためて再構築され……それは以前とは違う永続的な力をもつて私たちを内から支える」(160ページ)といっています。喪失体験から立ち上がった弟子たちに聖霊が注がれてキリストのイメージが確立されたのがペンテコステだという説明は、喪から新生へという現代を生きる私たちへの励ましのメッセージともなっているのです。

第4章はより積極的に不安と孤独を生き抜くあり方について述べられます。安息日の叡智、断酒会から広がっていく「無批判の語り合い」によってやわらげられる孤独、集うことで与えられる無条件の受容、そしてスピリチュアル・ペイン(霊的な痛み)の癒やし。それらはキリスト教会が本来もってきた力であるはずです。教会の交わりのあり方を考えさせられます。

不安と孤独は神と出会うところ。その旅路に寄り添い、適切なサポートを与える道案内の同伴者。ぜひ、手に取ってお読みください。

(まずだ・ことⅡ日本キリスト教団経堂緑岡教会牧師)
(四六判・二二四頁・定価二六四〇円・日本キリスト教団出版局)

相賀昇牧師説教集 好評発売中!

私たちのゲツセマネ



「神の声を耳を傾けることの中に世界の未来がある」と信じる信仰によって、説教者は神について語らねばならないが、語ることはできない。それでもあえてさせていたくのだ。説教者としての覚悟をもって臨んだ礼拝メッセージ36篇とエッセイ2篇で構成。

四六判美装・二五八頁・一七六〇円

ルター研究所発行

ルター研究 第19巻

ルター研究 第19巻
A5判美装・二五八頁・三〇〇円
徳善義和先生&鈴木浩先生「経歴と業績」

キリスト教は新たな改革期の口に立っている。T・ハリック
ルターの聖餐論と今日の課題 立山忠浩
隠れたる神の前に立つ 江口再起
新しい歌を始めるよう 伊藤節彦
すべての神学は文脈を持つ 宮本 新
旧約聖書からの説教と宣教 後藤由紀

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

霊に導かれ、 神を求めた一人の男

〈評者〉 小暮康久



押田成人 遊行の巡礼者
宮本久雄、石井智恵美編



「押田さんとともに歩む旅は、いかがだったでしょうか？」編者による巻末のこの言葉に表れているように、本書はカトリックの修道司祭でありながら、八ヶ岳山麓の高森草庵で農耕生活を営むかたわら、宗教の違いを超えて、世界中の神秘伝承（霊的生命）につながる人々と出会い続け、現代世界が孕む根源的な問題をはっきりと自覚し、預言者の行動し続けた押田成人（一九二二―二〇〇三年）の人生を辿ったものである。

第1章「誕生からドミニコ会との出逢いまで」では、幼少期のご両親や兄との関わり、戦時中の一高時代、ホイヴェルス神父との出逢いと受洗、戦後の哲学科での学びと司祭への召命、そしてドミニコ会との出逢いと闘病生活の始まりと、その後の押田師の深みへの歩みが次第に形となっていく青春時代の姿が描かれている。第2章「高森草

庵に生きる」では、タルト神父との出逢い、神学を学ぶためのカナダ滞在と樵との「ことばを超えた出逢い」、叙階後の帰国と萩焼のカリス「聖金曜日」誕生の経緯、そして療養の地としての高森の地で人々との円いから高森草庵が生まれていく姿が描かれている。ここでは「高森草庵覚え書」「お水のうた」「コトことば」についても語られている。

第3章「人々とのめぐりあいと九月会議」では、押田師が「地下流」と呼ぶ、それぞれの宗教や信の根底に流れる本質的なもの――神秘伝承――につながり、それを汲んで生きている世界中の人たちとの出逢いが描かれている。そうした出逢いと交わりがもたらした実りが「九月会議」である。九月会議は「著名人をかり集めての、いわゆる『国際平和会議』という如きものでは決してなく、平素かくれて、人類の苦しみを真に生き身に運んでいる底の人々の集ま

り」として、「どうしても緊急に、宗教界の責任ある立場の人々が集まらなければならない、ということが、皆を通して、はっきりした声として出てきた」ことによっておこった出来事であった。第4章「現代文明との闘いと思索の深まり」では、現代文明を動かしている精神、すなわち現代人の奢りと昂りにまつわる幻想が現代文明において現象化し、それがいのち（存在）の「根を潰し」「一人ひとりのかけがえのなさを奪う」ものであること、そこには「人間を超える『悪』の根拠地」があることへの洞察が深まっていく姿が、その時に具体的に展開していた「水」をめぐる裁判の経緯と併せて描かれている。第5章「闘病と晩年」では、「自らを葬る」と宣言してからの沈黙の最後の数年が描かれる。押田師は遺言のように四つの福音書の

翻訳に取りかかり、その一つである『漁師の告白（ヨハネ伝）』の「まえがき」でこのように語る。「聖書の世界と出会うためには、我々の歩みゆく方向は逆なのである。自らの手で捉え、解ろうとすることを断念することから出発しなければならぬ。そして、すべて我の匂いを去る方向へ歩みゆかねばならない。何故なら、聖書の伝承の示しているものは、そういう我の匂いを去った人々に、彼岸から与えられた、神のめぐみのながめなのだからである」。

師がこの世を去って二十年が過ぎるが、若き日に押田師と出逢った「地下流」において、今も共にいることを私自身感じてゐる。何故なら「地下流」は永遠だからである。（こぐれ・やすひさ）イエズス会司祭・霊性センターせらぎ所長

（四六判、一七六頁、定価二二〇〇円、日本キリスト教団出版局）

金子晴勇

ヨーロッパ思想史家

命題集

【第2回配本】

キリスト教思想史の例話集II

発売同時反響拡大！

キリスト教思想史を学ぶすべての人に、あたかも絵画を観るように理解できる例話集成！

第二弾！ 新書判美装・三三六頁・一五四〇円

I 『物語集』【既刊】／II 『命題集』【新刊】

III 『共生』の神秘【次刊】／IV 『愛のかたち』

V 『試練の物語』／VI 『霊性の輝き』

新書判・平均二〇四頁・各巻本体一五四〇円



本多峰子

新約聖書の人びと シリーズ第1弾！

イエスとの出会いと救い

新書判・一七六頁・一五四〇円



ここには私がいる。あなたがいて。マグダラのマリヤは娼婦でふしだらな女性だったのか。イスカリオテのユダは救われなかったのか。聖書に登場する人々を、キリスト教の伝統的解釈の縄目から解き放ってまっすぐ見つめ直したときに見えるくるものとは。その感動！

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

分断の時代の架け橋として ―聖人の言行が我々に示すもの―

〈評者〉 岩崎真紀



クリスマス小品集二
恋人たちの夜明け
及川 信著



本書は日本ハリストス正教会京都正教会で長司祭を務める及川信氏による、ヨーロッパや小アジア、北アジアに生きたキリスト教の聖人たちをめぐる物語である。著者が過去に著した二大祭日（降誕祭と復活祭）^{クリスマス}にちなむ著作『クリスマス小品集 みちびきの星』（ヨベル、二〇二一）、『イースター小品集 わたしが十字架になります』（同、二〇二三）につづく第三弾にあたる。

七つの小作品から成る本書の舞台はイスパニア（スペイン）とユダヤ（パレスチナ、イスラエル）からはじまり、リキア（トルコ南沿岸）、ローマ（イタリア）、ブリタニア（イギリス）とアイルランド、コンスタンティノポリス（トルコ・イスタンブール）、ゲルマニア（ドイツ）、シベリア（ロシア）、時代は十二使徒が生きた一世紀から日本に正教がもたらされる直前の一九世紀後半までと多岐にわた

る。読者は時間と空間を超え、聖人たちの揺るぎない信仰心、他者への無償の愛、そして彼らが起こした奇跡の物語へと誘われる。祝祭をモチーフにした物語のほとんどは著者による創作であるものの、その根底には実際に正教会に伝わる伝承や聖人伝が横たわっている。

第一話「星降る大地」は十二使徒の一人聖ヤコブ（一世紀）、第二話「くつしたの贈りもの」はサンタクロースのモデル聖ニコラウス（四世紀）、第三話「恋人たちの夜明け」は聖バレンタイン（？～二六九頃）、第四話「とらわれびとのクリスマスツリー」はアイルランドの使徒聖パトリキウス（？～四五七／六一）、第五話「きらめく聖歌」は名聖歌作者聖ロマン（四九六～五五六）、第六話「^{クリスマスツリー}聖樹伝説」はドイツの使徒聖ボニファティウス（六七二／五～七五四）と聖リオバ（七一〇頃～七八二）、第七

話「オーロラに照らされて」は北米の亜使徒聖インノケンティ（一七九七～一八七九）と日本の亜使徒聖ニコライ（一八三六～一九二二）がそれぞれ主人公である。

七つの物語のあとには各物語の象徴性についての土田定克氏（ピアニスト、尚絅学院大学教授、仙台ハリストス正教会聖歌隊正指揮者）による明快な解説「聖なる美は 時空を超えて」がつづく。作品世界の理解を助ける色彩豊かでシンボリックな種々の挿絵はアイコン画家の白石孝子氏による。

本書のほとんどの物語に共通しているのは、聖人と彼に従った敬虔な信徒たちが、キリスト教が受容されていない土地で、真摯に、そして、平和的に、宗教的・文化的他者と向き合い、分断された二つの共同体の架け橋となりながら、神のために生を全うしたという点である。

翻って我々が生きる二〇二五年はどうだろうか。海外ではウクライナ戦争、ガザ人道危機、アメリカ新政権のDEI（多様性、公平性、包摂性）政策廃止、日本国内では首長選挙における対立候補やその支援者に対するSNSを通じた誹謗中傷や真偽不明の情報 の流布、学校・会社でのいじめやハラスメント、家庭でのDVや虐待等、国家間、集団間、個人間の分断や他者への物理的・心理的攻撃は枚挙に暇がない。

本書に描かれた聖人たちの宗教的・文化的他者への向かい方は、時代や民族、文化、宗教の違いを超え、現代に生きる我々が異質な他者といかに共生していけばよいか、実に多くの教訓を伝えている。

（いわさき・まき 松山大学教授）

（四六判・二二六頁・定価一五四〇円・ヨベル）



人間とは何であるか

ヨブ記講解説教

及川信
OIKAWA Shin



現代は様々な分断がある。戦争が止む気配もなく、不条理に満ち満ちている。神さまに「なぜですか」と問う私たち。しかし、実は私たちこそ神さまから問われている。答えようのない問いを考え続けることが求められているのではないか。

四六判・並製
定価【本体2,400+税】円
ISBN978-4-86325-164-9



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

南北コリアの境界線に立つて

〈評者〉
榎本榮次

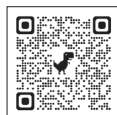


平和をつくるということ
とピースメーカー

キム・ドンスの物語

キム・ドンス著

高野啓子訳



国際平和活動家キム・ドンス教授（二〇二一年他界八五歳）が二〇一四年から二〇二〇年まで国境線平和学校特別招聘教授として、学生たちに自身の体験を交えた特別講義を行った。この学校は、ソウルから約一〇〇キロ離れた南北コリアの国境地域「鉄原」に二〇一三年に開校されている。六回の講義を要約しながら紹介する。

平和の構造に関するいくつかの問題

この地球は不平等と不正が支配しており、平和な環境とは言えず、一人の思いではどうしようもない巨大な構造から成り立っている。どう解決するか。それぞれが自分の置かれた環境の中でふさわしい独創的な方法で努力し、団結する力が必要である。

戦争と平和に関するいくつかの要因

現代の国際社会、国の中には戦争をいとも簡単に引き起こそうとする組織がある。どうしても戦争が必要であるとする軍国主義である。敵の攻撃性や残虐性を強調し、その危険性を過大に誇張して宣伝する。彼らは軍部の理念を美化し、国民の知らない膨大な金が使われる。国民は口を出せない。軍産複合体によって作り出される膨大な終わりのない落とし穴である。それは北にも南にも共通して存在する。それを止めるには、国際市民が団結して立ち上がることである。

平和的統一に関する議論

コリアの南と北は戦争による統一はしないという考えに同意している。それは民族の滅亡になるから。経済的交流と支援が交流を深めると同時に和解の雰囲気向上させ、統一への雰囲気高める。そのような投資が早期かつ多い

ほど統一の可能性は増すように信じる。

アメリカでの統一運動

五〇余年をアメリカで過ごした教授は、韓国の民主化と南北統一のために活動してきた。キリスト教会の人たちから大きな支えもあるが、一方でスパイ、アカと排除される和解を求めて何度も北朝鮮を訪問し統一の道を模索。そこで気づかされることは、互いの意見を冷静に聞くこと、真意を知り和解することの必要性である。

平和構築としての仲裁論

平和を成し遂げるために、非常に大きな構造的な問題を解決しなければならない。どちらかが勝つか負けるかではなく、両者を和解させるための理論「仲裁論」が必要である。平和を語る人の心の中に和平、平安、平和の基盤を

備えることが最も重要である。

平和の実践と平和教育

平和を作る人の心に五つの準備が必要である。①自身身を愛すること。②近しい家族との平和。③全く関係のない人々との平和。④構造的な関係での平和⑤国際社会での平和が求められる。

以上、武力によらず、自分に引き入れるのではなく、また相手に迎合するのでもなく、和解と統一を求める平和教育の実践の中からの言葉である。強い説得力と希望が湧いてくる。翻訳者の高野氏の熱い思いが伝わる本である。

(えのもと・えいじ Ⅱ 学校法人敬和学園理事長)
(A5判・八八頁・定価八八〇円・出版社 i p p o)

明日なにをすべきか

生涯現役が贈る

人生の道標

企業・コンサル・大学・NPOの
現場を生きた85歳

島田 恒 [著]

生涯現役が 贈る人生の 道標

企業・コンサル・大学・NPOの
現場を生きた85歳

明日なにをすべきか

ドラッカーをはじめ歴代の経営者・
実業人に学んだ著者が、
折々の社会・経済を見据えた幅広い
実践をふまえ、後進に託す
珠玉のメッセージ。

ドラッカーをはじめ
歴代の経営者・実業人に
学んだ著者が、
折々の社会・経済を見据えた
幅広い実践をふまえ、
後進に託す
珠玉のメッセージ。

【目次】第1章 人生二毛作——著者の自分史
から／第2章 私たちは今どこにいるのか——
経済と政治を中心に／第3章 ホントウの
豊かさを求めて——文化と共同、そして人生

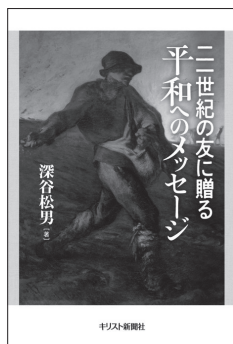
四六判・並製・172頁、定価1,650円(税込)

キリスト新聞社 since 1946

〒112-0014 東京都文京区関口1-44-4 7F
03-5579-2432 support@kirishin.com

日本国憲法への深い洞察と 平和への熱い思い

〈評者〉樋口 進



二一世紀の友に贈る
平和へのメッセージ
深谷松男著



二つの世界大戦により甚大な犠牲者を出し、その後東西冷戦の危機を経て、ソ連の解体、冷戦の終結を迎え、平和への期待を持って迎えた二一世紀である。しかし予想に反して地域紛争が頻発し、四半世紀を経て、ウクライナ、パレスチナなどでの戦争において多くの犠牲者が出、さらに核兵器使用が現実味を帯びている二一世紀の現在にあつて、

本書は子ども時代に戦争を体験した九〇歳を超える著者が、平和への熱い思いを持ってすべての人に贈るメッセージである。冒頭で著者は、本書執筆の動機について「自分の九十余年の来し方を振り返りそれらのこと（評者注＝平和の問題）を考へつつ、二一世紀に生きる子や孫の世代の人々に率直に語りかけたい思いで、この小論を少しずつ書き綴ってきた」と述べている（一一頁）。

著者深谷松男氏は、民法の碩学であり、金沢大学名誉教

授、元宮城学院院長である。専門の分野で貴重な研究書を多く著しているほか、日本基督教団常議員、キリスト教学校教育同盟理事、日本聖書協会理事等を歴任し、日本のキリスト教界に重要な働きをされてきたキリスト者である。この立場から著した前著『福音主義教会法と長老制度』（一麦出版社、二〇二四年）も高く評価されている。

さて本書は一四のテーマから構成されている。すなわち、「平和を祈り求めて」「憲法前文に学ぶ——戦争抑止と国民主権」「憲法前文の平和主義」「平和のうちに生存する権利について」「第九条の戦争放棄について」「改めて日本国憲法制定の意義を考へる」「核の時代と平和論」「平和への堅固な姿勢」「憲法第九七条と基本的人権の基本権性」「私たちに信託された基本的人権」「平和の基礎としての人権とキリスト教信仰との関係」「平和の福音と平和への意志」



日本聖書協会

God's Word — Life for the World

N・T・ライトによる子どもから
大人まで楽しめる聖書物語

わたしの 聖書物語

神さまの大いなる計画



N・T・ライト : 著

ヘレナ・ペレス・ガルシア : 画

標珠実 : 訳

天地265×左右215mm

厚さ24mm 296頁

税込価格 **3,960** (3,600+税) 円

ISBN978-4-8202-9288-3

英国の著名な神学者 N・T・ライトが贈る今までにない聖書物語。創世記からヨハネの黙示録までのそれぞれの小さな物語がひとつの大きな物語——すべてを正しい姿にもどし、天と地をひとつにするという神さまの大いなる計画——を織りなしています。



お求めは全国のキリスト教専門書店
お問合せ ☎03(3567)1987 (頒布部)
<https://www.bible.or.jp>

「よきサマリア人の譬えから学ぶ」「結びとして——神の赦しと人間の尊厳」である。

これらからも分かるように、著者は日本国憲法を正しく理解することの大切さを強調し、特に前文、第九条、第七条を専門家の立場から深く掘り下げ、解説している。まず著者は、前文の重要性を強調し、ここに国民主権、基本的人権、平和主義の基本原理が主張されているとして詳細に解説する。第九条については成立の過程を綿密に検証し、自衛のための戦争も国の進路を誤らせる危険性があることを指摘し、外交的知恵と努力を尽くすべきだと主張する(六五—六六頁)。さらに、アメリカから押しつけられたという「押しつけ憲法論」の誤りを論証し、自民党の改憲案を批判する(一一五頁)。また、基本的人権を侵すことの

できない永久の権利と定めた第九七条を削除しようとする改憲案には、幾多の試練を経て基本的人権が確立されてきたことを無視するものとして批判する(一五六頁)。

本書には聖書の言葉も数多く引用されているが、著者がキリスト教信仰に基づいて最も主張していることは、平和の基は、神の似姿として創られた人間を個人として尊重する基本的人権であるということである(一七六頁)。

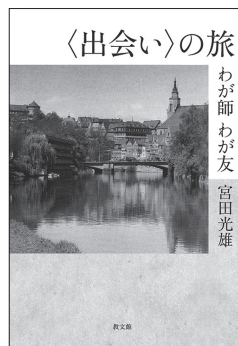
平和がかつてないほどに脅かされている時にあって、多くの人が本書によって平和への思いを深められることを切に願う。

(ひぐち・すすむ Ⅱ 夙川学院院長・宗教主事、神戸教育短期大学客員教授)

(四六判・二三四頁・定価一九八〇円・キリスト新聞社)

《宮田光雄の時代》のようこび

〈評者〉 最上敏樹



《出会い》の旅
わが師 わが友
宮田光雄著



筆者が初めて宮田光雄先生のお名前に接したのは『非武装国民抵抗の思想』（岩波新書）を通じてだった。大学に入学してまもない頃で、著者がどういう方なのかも知らず闇雲に読んだものである。ただ、本自体は実に明晰な筆致で日本の志操を説き、同時により広い世界観から堅い信念に立っていることを感じさせて、青年の心に颯爽と響きわたる深い旋律を残した。

その後、筆者が国際法学者になり別分野への道を歩んだこともあって、お目にかかる機会もないままに長い年月が過ぎた。初めてお目にかかったのは、なんと二〇〇七年になってからのことである。南原繁研究会で基調講演をなさった時だった。恩師の坂本義和先生が共同基調講演者として登壇された、珍しい設営である。坂本先生が「宮田君が君に会いたいと言っているから来なさい」とおっしゃる

ので、緊張して出かけていくと、坂本先生が宮田先生に「ほら、君の恋人の最上君だよ」と宮田先生をからかい、腰を抜かすほど驚いた。筆者のささやかな仕事を宮田先生が心に留めていてくださったものらしい。

一介の国際法学者にすぎないのに、なぜかよく宮田先生の御本の書評の依頼をされた。手許の記録で確認できるものだけでも、『国家と宗教』、『十字架とハーケンクロイツ』、『平和思想史研究』の三著がある。そういう仕事を与えられたおかげで、逆に宮田先生に導かれてよく勉強した。とりわけデイトリヒ・ボンヘッファーとカール・バルトについて。だから筆者は、これまでのところ徹頭徹尾、宮田先生に私淑するだけの単なる一読者であり、門前の小僧である。

＊



新刊

聖書学論集55

日本聖書学研究所編

●A5判並製 80頁

定価3,300円(税込)

ルカ1章における

ジェンダー

—規範の逆転、再生産、

あるいはその狭間—

安田真由子

●

善悪を知る悪しき人間

—原初史における人間観—

山吉智久

●

二つのユダヤ戦争と共同体

アイデンティティの模索

浅野淳博

アッカド語 文法

青島 忠一朗

●B5判並製 300頁

●定価4,400円(税込)

古代メソポタミアで主要な言語であったアッカド語。本書はアッカド語の基礎文法を日本語で本格的に学べる初の文法書です。楔形文字の読み方やアッカド語の発音に始まり、各種の文法事項をわかりやすく解説。

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402

☎045-433-5257 最後の一石。感謝

(四六判・二九八頁・定価三二〇〇円・教文館)

書評をというご依頼だったのに、やや私的な回顧録まがいの文章で始めたのは、筆者自身が昨年、南原繁研究会で基調報告の機会を与えられ、南原先生このかた脈々と流れる知的なつながりをしみじみと感じたからである。若いころに幾人かの先生たちから注ぎ込まれた志操がそこにはよみがえっていた。そして人間の知的あるいは精神的なつながりは、大学の枠も超える。この『「出会い」の旅——わが師 わが友』には、そういう、多くの師と友に対する敬意があふれていたから、まずはそういうつながりの恩寵に触れずにはいられなくなったのである。

そのように、この本には実に多くの人々への懐かしみと慈しみに満ちた回顧が丁寧に記されている。多くがすでに他界された方たちだが、亡びしものは懐かしきかなという

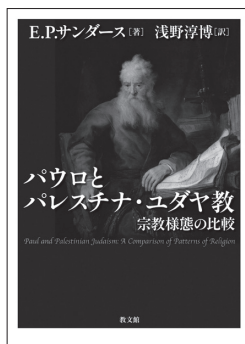
過去の美化としてでなく、その方たちに邂逅したことをどれほど大きな恵みであると宮田先生が考えておられたか、それが涼やかに伝わってくる回想なのだ。南原繁先生、丸山眞男先生、福田歓一先生、坂本義和先生、隅谷三喜男先生、安江良介さんなど、一時代を画した大先輩たち。まるで皆が一堂に会して一つの食卓を囲んでいるような感懐を覚える。

バルトや(章題には掲げられていないが)ボンヘツファーなど、重要な神学理論家の思想のエッセンスも簡潔かつ的確に紹介され、宮田先生がもたらした学問の新風が漂ってくる。これは、これからもまだ続く、『宮田光雄の時代』のすぐれた記録でもあるのだ。

(もがみ・としき Ⅱ パーゼル大学客員教授)

二〇世紀の新約学の金字塔、 待望の翻訳出版！

〈評者〉 山口希生



パウロとパレスチナ・
ユダヤ教

宗教様態の比較

E・P・サンダース著

浅野淳博訳



先日のミュンヘンにおける安全保障会議で、アメリカのヴァンス副大統領は並み居る欧州首脳を前にしてヨーロッパで言論の自由が後退していると指摘し、深い（不快？）衝撃を与えた。とりわけヴァンス氏が例として挙げた、イギリスで祈っていただけの人が逮捕され罰金刑を課されたという話は、かつて英国で暮らしていた評者には俄かには信じがたく、イギリスの友人にすぐに真偽を確認したほどだった。しかしそれが事実だと知り、再度ショックを受けた。だが、行き過ぎとも思える欧州でのSNS等の検閲の背後には、過去に対する深い反省があることも忘れてはならない。宗教改革者のマルティン・ルターが晩年に書き残したユダヤ人に対する記述は現代の私たちには読むに堪えないもので、特に今日のドイツでは間違いなく「偽情報」や「デマ」として禁書扱いされるだろうが、それはそうし

た言説がナチスドイツの時代に亡霊のようによみがえりナチスの反ユダヤ政策の正当化に使われてしまったことへの痛切な自責の念によるものだ。

そして、こうした反ユダヤ主義の亡霊に蝕まれてしまったのは実は西洋のキリスト教神学なのだということを白日の下にさらしたのが本書である。その意味で、本書は上述のヴァンス演説以上に二〇世紀のキリスト教界、特に新約聖書学界に衝撃を与えた。評者の乏しい経験に照らしても、「革命」という言葉で評された書は後にも先にも本書しかない。サンダースによって書かれた本書の学問的誠実さは疑う余地がない。一九世紀、二〇世紀における新約学界の巨人たちが古代ユダヤ人の手による一次文献を「そのもの」として読むことをせずに、先行研究に無批判に追従したり、あるいはキリスト教神学の色眼鏡で読んできたとい

うサンダースによる告発は事実として認めざるを得ないし、あらゆる新約学の徒に警鐘を鳴らすものであろう。

同時に、イエスやパウロの時代のユダヤ教が「行為義認」の宗教ではないというサンダースの主張が正しいのならば、西洋のキリスト教神学、とりわけプロテスタント神学はこれまで五百年にわたって築き上げてきた自らの伝統を根本的に再検証しなければならないことになる。なぜならキリスト教は自らを定義する際に、あまりにも多くの場合に安易に『ユダヤ教』を反面教師として描いてきたからだ。もしキリスト教との関係でユダヤ教についてなにがしかのことを書くのであれば、ユダヤ教の外典・偽典を含めた多くの一次文献を曇りのない目で読み込まなければならぬ。ユダヤ教があくまでキリスト教とは対極にある「行

為義認」の宗教であると主張したのであれば、ユダヤ教の文献そのものからそれを立証しなければならないということだ。なるほど「イエスはユダヤ人の偽善を厳しく非難しているではないか、それで十分ではないか」という反論もあるが、彼自身がユダヤ人であるイエスの言葉の意味を正しく捉えるためには、彼の同胞たちの神学的立場の多様性や様々なニュアンスを正しく認識しなければならない。これは大変な作業であるし、可能ならば避けて通りたいと思ってしまうかもしれない。だが、西洋キリスト教の最大の暗部である反ユダヤ主義を克服するためには、これは避けては通れないことなのだ。末尾になるが、この大著の翻訳という偉業を成し遂げた浅野淳博氏の功績をたたえたい。

(やまぐち・のりお 東京神学大学特任准教授
(A5判・八九〇頁・定価二二〇〇円・教文館)



キリスト教書総目録

「戦後80年」を戦後50年+30年で考える

巻頭エッセイ 朝岡 勝氏

2025年版
(12月中旬発売)

内容

総記・年鑑・辞事・典 図説年表・全集・著作集 叢書・講座 聖書・聖書学
神学・宗教学 思想・倫理 伝記・ラッセル・信仰・入門書 人生論 説教集
文学・小説 評論・エッセイ 詩・劇・音楽 美術・建築 教育・保育 心理・社会福祉
児童・絵本・讃美歌 式文・DVD CD 点字 キリスト教関連雑誌・新聞
書名索引・著者索引・掲載出版社名簿

■ A5判 一般頒価1冊286円+税 送品手数料200円
■ お近くの書店様でお求めください。

一般財団法人 キリスト教文書センター

〒162-0014 東京都文京区関口1-44-4
TEL:03-3260-6520

自分自身と群れ全体とに気を配りながら

松本雅弘著

長く牧師を務めてきた著者の、主から託された教会への思いがほとばしる説教と論考。併せて信徒による3本のインタビューを収録し、説教の方法、牧会との関係、神学との切り結びなどについて牧師の率直な声を引き出す。

A5判・310頁・定価2200円

丹波市氷上町常楽7911成松伝道所「仮題」

大野顯二と大野節子の37年

大野顯二著

兵庫丹波の伝道所で牧師として働き続けた大野顯二、その妻大野節子の37年間の歩みを、牧師の説教と講演でたどる。地域の中に教会が存在するとは、牧師であるとは、キリスト者であるとはどういうことかを、静かに考えさせる。

四六判・200頁・予価1800円

イザヤ書註解Ⅱ

11章—27章

ジャン・カルヴァン著

堀江知己訳

待望の続巻。イザヤ書註解は一五五一年に出版された。カルヴァンにとって初めての旧約聖書註解である。詩篇註解に比肩する膨大な分量であり、邦訳では全五巻となる予定。

A5判・620頁・予価6500円

INFORMATION

近刊情報

■キリスト新聞社

神と民の契約

出エジプト記19〜40章・十戒による説教

松本敏之著

2022年7月から2年以上にわたり、日本キリスト教団鹿児島加治屋町教会の主日礼拝で語られた24編の説教を収める。『神の民の解放』（2023年）に続く、出エジプト記説教集第2巻。

四六判・328頁・定価2200円

世界音楽の旅

オルガニスト兄玉麻里の教会巡行録

兄玉麻里著

オルガニストとして世界中に招かれ演奏を披露してきたカトリック信徒の著者が、「カトリック生活」「カトリック新聞」「キリスト新聞」「聖母の騎士」に連載した記事を収録。

四六判・470頁・定価1980円

■日本キリスト教団出版局

ルピナス・ヴァレーへの道

夢をあきらめないで

森本佳代、森本二郎著

写真家森本二郎さん家族が岡山県新庄村に作った夢のガーデン「ルピナス・ヴァレー」。四季折々の花が咲き乱れる庭作りに携わる家族の物語。

A5判・80頁・定価1760円

子どもと育ちあうために

——「どうしよう?」と悩むときのヒント

村上純子著

子どもたちの特徴や起こりうる課題を年代ごとに取り上げ、周りの人ができるケアや配慮を紹介。子どもへの理解を深め、共に育つために。

四六判・136頁・定価1650円

老いをどう生きるか

渡辺正男著

1937年生まれの熟練牧師が、聖書に聴きつつ「老いをどう生きるか」を思い巡らし、「自分に言い聞かせる思いで」記す。

四六判・160頁・予価1980円

教会は初めてのあなたへ

32名の牧師からの手紙

小林よう子、柳本和良、川本恵子、他29名著

『こころの友』で連載中の「あなたへの手紙」の書籍化。キリスト教の教えや教会の姿をキリスト教用語を使わずに、32人の牧師が手紙形式でわかりやすく語る。

四六判・112頁・予価1300円

■教文館

日本キリスト教神学小史

——教義学の視点から

近藤勝彦著

植村正久、高倉徳太郎、熊野義孝、北森嘉蔵、大木英夫——私たちは彼らの神学の何を批判し、何を継承すべきか? 日本を代表する5人の神学者・牧師の教義学の確立と展開

INFORMATION

近刊情報

に注目しながら考察する。

四六判・218頁・定価2420円

近代世界と宗教

——19世紀ドイツのカトリック社会・政治運動

桜井健吾著

「カトリック教徒大会」「カリタス」「コルピング職人組合」「カトリック労働者同盟」「キリスト教労働組合」「中央党」などの社会的・政治的運動の事例から、近代ドイツの国家と社会の形成を検証した画期的な労作。

A5判・424頁・5940円

古代中世キリスト教における女性イメージ(仮)

山田 望、袴田 玲、坂田奈々絵、山田 順編

キリスト教史学会監修

キリスト教史学会の大会シンポジウムを元に、西方と東方における女性キリスト者のイメージの多様性を浮き彫りにする論集。文献学的、考古学的など多角的なアプローチでキリスト教女性論の再構築を目指す。

A5判・200頁・定価4070円

ゴッホの宇宙

正田倫顕著

強烈な絵画表現で魂を揺さぶる画家ゴッホ。彼を宗教的人間として捉え、作品と手紙の手堅い分析からその世界観を解き明かす犀利な思索!

A5判・口絵48頁+本文230頁・定価3080円

鈴木道也著 試論「十全のイエス・キリスト」へ 違いがありつつ、ひとつ

A5判・四五二頁・三〇八〇円



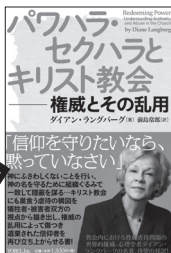
大貫隆先生推奨!...論述が平靜かつ公平。先行研究からの引用は常に正確かつ肯定的で、自説の中へ統合する姿勢。無益に論争的などころがなく建設的。文体は一般読者向けで分かりやすい。図版は明快で読者の理解を大いに助ける。「いづれのみ真か?」ではなく、「いづれもまた真」でもなく。ひとつに結び合わされ、初めて見えてくる聖書の原風景!

D・ラングバーク 前島常郎訳

権威とその乱用

四六判・二八八頁・在庫僅少一九八〇円

パウハラ・セクハラとキリスト教会



「信仰を守りたいなら、黙っていないさ!」
神にふさわしくないことを行い、神の名を守るために組織ぐるみで一致して隠蔽を謀る...権威の乱用によって傷つき遺棄された信仰者を再び立ち上げさせる書!

D・ワトソン&P・ワトソン
訳者・松村隆/監修・福田崇

A5判変型・三〇四頁・一九八〇円

全信徒祭司の教会を建てあげる

全信徒が弟子、イエス運動の担い手。今までの宣教論を覆す大宣教命令親書。生活のすべての場所で聖霊の働きに拠りながら、できる限り非宗教的であろうと努力する。

山口雅弘 ガリヤに生きたイエスの「共食と共生」 「生きる」をいつくしむ

好評発売中! イエスによる「神の国運動」、その中心は「共に食し、共に生きること」!



「キリスト教の原点」であるイエスの生き方を現代に回復することこそ急務「平和」を求める全ての人々に贈る力作! 第二弾! 新書判・二八〇頁・一六五〇円
既刊 ガリヤに生きたイエス 新書判・三二八頁・一六五〇円

金子晴勇 キリスト教思想史の例話集 全6巻

II 命題集

新書判・三五二頁・一五四〇円



キリスト教思想史を学ぶすべての人に、あたかも絵画を観るように理解できる例話集成!
I 物語集 *好評発売中 新書判・三四四頁・一五四〇円

金子晴勇責任編集

ドイツ敬虔主義 著作集 全10巻

四六判上製

- 第1巻 シュベナー「敬虔なる願望」佐藤寛史 金子晴勇訳
- 第2巻 シュベナー「新しい人間」山下和也訳 最新刊・四〇〇頁・三〇八〇円
- 第3巻 シュベナー「再生」金子晴勇訳
- 第4巻 フランケ「回心の開始と継続」薗刈晃夫訳 第四回配本予定
- 第5巻 ベンゲル「フリーモン」と歩んだ道と言葉 若松功一訳
- 第6巻 ツインツェンドルフ「福音的真理」金子晴勇訳 第三回配本予定
- 第7巻 エーティンガー「自伝」喜多村得也訳 第五回配本予定
- 第8巻 エーティンガー「聖なる哲学」喜多村得也訳 二八八頁・三〇〇円
- 第9巻 テルステーゲン「真理の道」金子晴勇訳
- 第10巻 ドイツ敬虔主義の研究

画期的著作集 話題!

書店名	郵便番号	住 所	電 話	フ ァ ッ ク ス	U R L	メ ー ル	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenritkan_syoten_0530@yahoo.co.jp	02350-0-874
エッセイの木	980-0012	仙台市青葉区錦町1-13-6 エマオ1F	022-223-2736	022-302-6678	https://sendaibcs.uccj.jp/	info@sendaibcs.uccj.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新館2-2 千葉カサチャセンタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vestia.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
待晨堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimdo.com/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	112-0014	文京区駒込1-44-4 崇徳ビルB1Fキネマ(外編専門)	03-3260-5663	03-3260-5637		tokyo@nikkikan.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.tyogiga.jp/~tyogikansetsu.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用		00560-8-51419	
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	466-0045	名古屋市中区大須1-16 日本キリスト教団熱田区内	052-680-8090	052-680-8091	http://nagoya-seibunsha.la.coccan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-iret.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-iret.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osakabcs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店(聖徳社)	591-8044	大阪府堺市北区长尾町2丁1-18	072-254-2233	共用		sakaixx@outlook.jp	00970-0-172228
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkikan.co.jp	00170-2-421390
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古大道路/西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwbt3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.goddes.jp/matsuyama_1007/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店/ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花4丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacbs.net	info@okinawacbs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

福音と世界

2025年5月号

特集Ⅱ 太初に言あり

聖書翻訳と日本語

寄稿者Ⅱ 具志堅聖、岩本潤一、岡野絵里子、

遠藤佳那子、藏中さやか、吉田新

ドイツ敬虔主義から学ぶこと（梅田與四男）

連載 ぼやき牧師のさすらい説教録（富田正樹）

／異端者の世界航海（福岡揚）／証言としての

旧約聖書（田島卓）／「日本のキリスト教」を

読む（山口陽）／新約釈義 ルカ福音書（山崎

ランサム和彦）、八木重吉の聖書（今高義也）他

A5判・定価660円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyo-pb.com

編集室から

20年以上前に制作した書籍について、問い合わせがあった。

絶版になってから15年以上も経過している書籍を、今でも大切にしてくれていることは嬉しかったが、一方で「面倒臭そう」というネガティ

ブ思考が頭を占領した。

そんな考えを打ち消して探した著者の電話番号は、すぐに見つかったが、連絡が絶えて久しいので果たして有効なのだろうかと思い一応、インターネットで下調べをした。すると、地元の情報誌がヒットし、ご活躍の様子をうかがい知ることができた。

それでも、不安を抱えながら電話をすると大変懐かしそうな声が応対してくださった。筆者が覚えていてくださっ

予告

本のひろば

2025年6月号

本・批評と紹介

（巻頭エッセイ）『自分のなかに歴史をよむ』 今

井小の実

（書評）山口雅弘著『生きる』をいつくしむ、

東洋英和女学院大学死生学研究部編『死生学年報

2023』、関西学院大学神学部編『明日の地域と教

会』、日本キリスト教団出版局編『説教黙想アレ

ティア 創世記1―28章』他

たことに感謝申し上げると、「忘れるなど、とんでもない」と返事が返ってきた。

著者によると、出版後、多くの団体から講演や指導の依頼があり、定年後の今も、全国各地から招かれ忙しくしているのだそうだ。「40年前に、自身の職場のために書いたものが、こんなに用いられるなんて……」受話器の向こう側で、感慨深い様子の著者が見えるような気がした。その時もちょうど、遠方へ講演に行く支度をなさっていたようだった。

最後に「出版のチャンスを与えてくださりありがとうございます。ございました。おかげで人生が豊かになりました」と著者。筆者も「良い仕事に携わせてくださり感謝です」と言い交わして電話を切った。そして「面倒臭いと思って、ごめんなさい」心の中で一礼した。

（吉崎）

非戦と抵抗の教育

3月24日

障害児教育の源流にあるもの

教育の原点を問う

鈴木文治著

(すずき・ふみはる氏は日本基督教団牧師、養護学校元校長)

差別と偏見が強かった富国強兵の時代から、障害児の教育を志す少数の教師たちがいた。彼らのキリスト教的な背景を辿り直し、著者自らの教師としての経験を踏まえ、いまだ人間を有用性で計る教育に根本的な問い直しを迫る。

四六判・定価2310円



静寂者ジャンヌ

生き延びるための瞑想

3月25日

山本賢蔵著

(やまもと・けんぞう氏は元NHK外信部記者)

ルイ一四世の時代を生きた一人の女性の生涯と思想に迫る。彼女は「異端の女性神秘家」として闇に葬り去られてきたが、その生涯は、男性支配のミソジニー社会の中で自己を貫き通した鮮烈な抵抗だった。日本で初となるギュイヨン夫人の本格評伝。柳田邦男氏推薦。

四六判・定価3300円



自分自身と群全体とに気を配りながら

4月11日

松本雅弘著

(まつもと・まさひろ氏は高座教会の元牧師)

主から託された教会に37年間仕えた牧師の思いがほとばしる説教と論考。併せて3本のインタビューを収録し、説教の方法、牧会との関係、神学との切り結びなどについて牧師の率直な声を引き出す。

A5判・定価2200円



倫理

DBW版新訳

キリスト教倫理の可能性!

大反響

デイトリヒ・ボンヘッファー著／宮田光雄監訳

ボンヘッファーがライフワークとして取り組み、ナチによる逮捕と刑死によってついに未完に終わった倫理学。新版全集第6巻(DBW6)は奇跡的に亡失を免れた草稿を徹底的に校訂し膨大な脚注を付して成立順に再構成。待望の完訳。四六判・定価6930円



戦後日本とキリスト教

敗戦の混乱期から社会制度の確立期まで

2月14日

富坂キリスト教センター編

敗戦後の急激な社会変革にキリスト教界はどう対応したのか。占領期の宗教政策、キリスト教ブーム、共産党問題、在日コリアン教会、沖縄の土地闘争、キリスト教女子教育などに着目。寄稿者＝大久保正禎、落合建仁、寒河江健、李相勲、福山裕紀子、渡邊さゆり、原誠、戒能信生

◆四六判・定価2200円

ユーモア入門

人生を楽しむ7法則

宮平望著

神学者バルトの標語は「力強く、落ち着いて、ユーモアをもつて」だった。ではユーモアとは何か? 聖書から落語まで古今東西の笑いを参看し、その多様な形と本質を探る。◆A5判・定価2310円



ルピナス・ヴァレーへの道

夢をあきらめないで

◆A5判 並製・80頁・定価1,760円

森本佳代／森本二太郎

2025年4月17日刊行予定



「世の中をもっと美しく」とのバーバラ・クーニーの言葉に励まされ、2008年に岡山県の新庄村に移り住んだ森本二太郎さん、佳代さん、潤太さんの家族。荒地から今やルピナスが花咲く美しい庭となったルピナス・ヴァレー創造の物語。

子どもと育ちあうために「どうしよう?」と悩むときのヒント

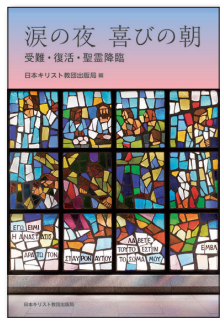
2025年4月25日刊行予定



村上純子
幼少期、小学生、思春期といった年代ごとに、子どもたちの特徴や起こりうる課題を取り上げ、周りの人ができるケアや配慮を紹介。
◆四六判 並製・136頁・定価1,650円

涙の夜 喜びの朝

2025年4月4日刊行



日本キリスト教団出版局 編
「受難節」「復活日」「聖霊降臨日」の教会暦の流れの中で、主の恵みを心に刻んで過ごすための祈りの言葉とショートメッセージ。
◆四六判 並製・112頁・定価1,540円

本のひろば.com



定価七八円(税抜七一円) (〒63円)

一九五七年七月七日 第三種郵便物認可
二〇二五年五月一日発行(毎月一回一日発行)
本のひろば 第八〇九号 二〇二五年五月号

発行所 〒112-0014 東京都文京区関口一四四一四 一般財団法人キリスト教文書センター
発行人 金子和人 電話〇三・三三・一六五二〇 振替〇一七〇五一一一六七九
編集人 村上信児 印刷所 モリモト印刷(株)
発売所 日本キリスト教書販売株式会社 電話〇三・三三・一六〇一五六〇

一年分二〇〇円(送料共)